

小学校における「背の順」の整列 —教員の受け止めと元児童の回想から—

榊原 禎宏・母木 颯人*

"Back-to-Back" Alignment in Elementary School: Exploring Teachers' Perceptions and Graduates' Recollections

Yoshihiro SAKAKIBARA and Souto HOUGI*

Accepted June 13, 2023

抄録：学校は自然物ではないにもかかわらず「第二の自然」かのように見えるほどに、多くの人々にとって馴染みのある人工装置である。ところが、意図的に製作されているはずの学校のすべてが、不思議なことに説明できるわけではない。その背景や理由を明確に述べることはできないにもかかわらず、広義の教育制度は厳然と存在する。本報告は、その一つとして小学校における「背の順」での整列を取り上げ、教員による受け止めと卒業生の回想を手がかりに、経路依存性にもとづく「見えにくい」制度が持つ意味を考察した。

索引語：小学校、「背の順」整列、身体、学校経営、経路依存性

Abstract: Schools are often regarded as familiar and almost "second nature" to many, yet they are constructed artificial entities rather than natural objects. Despite their intentional design, some aspects of schools remain unexplained. This paper delves into one such system, namely, the "back-to-back" alignment in elementary schools, aiming to unveil the significance of this somewhat elusive arrangement through the perspectives of teachers and the recollections of graduates. By examining the perceptions of educators and former students, this study sheds light on the intricacies of the "hard-to-see" system and its impact on the educational experience.

Key Words: Elementary School, "back-to-back" Alignment, Body, School Management, Path Dependence

* 京都市立宇多野小学校常勤講師

1. 課題の設定－教育制度の経路依存性

学校は、いうまでもなく自然物ではない。現在のわたしたちが思う学校は、近代社会の到来に伴って発明された人工物である。そして、学校は「第二の自然」に見えるほどに、多くの人々にとって馴染みのある存在となっている。この背景には、ほぼすべての人が学校に通っているだけでなく、同一年齢の90%に達するほどの人々が義務教育に加えて後期中等教育段階まで、つまり12年間もの学校生活を経験していることが挙げられるだろう。

ところが、人の手によるからといって、学校のすべてが説明可能なわけではない。1872（明治5）年の学制以来、150年にわたる経緯の中で、理由や背景が明らかでないにもかかわらず、当然のように存在するものもある。たとえば、学校への「就学」について、明治20年前後からなぜ就学率が上昇したかの解釈をめぐって、柏木（1995）は「児童の学校に対する態度」が決定したという仮説から、次のような議論をしている。

そこには二つの局面における集団形成の方法が、漸次シンクロしてゆく姿を見いだすことができる。一つは学級制導入といった制度的局面であり、いま一つは民衆側の局面である。（中略）

これらの二つの局面を二本の糸に例えるならば、当初は平行関係にあった各々が、各々の変容の必要にしたがって漸次接近し、一本の糸として縊りあっていったということができよう。その結果学校の中で形成される集団と、学校の外で形成される集団が同質のものとなるのである。このことは子ども達のなかで、学校外の生活と学校内の生活が、一本に結びつくことを意味する。ここではじめて学校は、子ども達のなかで、彼らの“生活の一部”としての位置を得るのである¹⁾。

これによれば、子どもの学校外の生活模様に歩調を合わせるように学校制度の変化が生じたこと、具体的には等級制から学級制に変わったことが、子どもの学校に対する違和感を軽減させ、この時期から学校内での集団性を重視する教育思潮も強まっていったことがわかる。

そして、第三次産業が主体となった産業構造においては、第一次産業のような生活と労働の場の一致は希有であり、大人の集団的な関係の相似形を、子どもに見出すことは難しい。ところが、かつての村落共同体的な人間関係に同期した学級制と学年制は、少なくとも義務教育段階で今なお強固に維持されており、この制度ゆえに生じる「学級崩壊」や「いじめ」「不登校」などが「教育病理」とすら解釈されている。学校外の人間関係は可変的なのに不変的だと認識が誤っているゆえに、事実の解釈が倒錯するのである。

学校外では、グローバル化をはじめ低コンテクスト依存の社会へと変化しているにもかかわらず、かたや学校内では、クラスメイトは友人さらには親友と扱われ、一斉授業や班や係での集団主義的な活動が恒常的、さらには協力や一致団結といった「学級目標」スローガンが当たり前の学級経営、つまり高コンテクスト依存での人間関係が目指されている。こうした、かつての経緯が忘れられたままに現在を規定する経路依存性は、学校の制度にも観察できる。本報告は、こうした一例と仮説できる身長を指標にした整列に着目し、「何となく」存在する教育制度の不思議さとそれを革新することの難しさを確かめようとするものである。

2. 小学校における「背の順」での整列という問題

背の順にもとづく整列とは、身長の高い—低い順で一列に並ぶルールを指し、学校で一般的に見られるものである。村松（2003）は、ある小学校教師の推計によれば小学校の6年間で児童は約1500回も整列すると述べている²⁾が、そこでは背の順が通例と言えるだろう。

一方、この仕掛けは子どもたちにある感情を惹起する可能性がある。たとえば、身長が高くない児童は、整列の際に前方に並ぶことになりがちである。そこで、大きくて力強くあるべきというジェンダーバイアスの影響を受けて、とくに男子は自信を失うかもしれない。ところが、学年が上がるにつれて背が伸びはじめると、次第に列の後方に位置することになる。身長の順に整列することで、自分の身長が周り以上に伸びていることに気づき、自身の成長を実感することだろう。さらに、学年を上るにつれて、自分以上に周りの背が伸びることで焦ることにもなる。かくも、このルールでの整列が、児童生徒を一喜一憂させるのである。

ところが、この整列について説明がなされる場面は想定しがたい。教員側には何らかの意図やねらいがあるかもしれないが、それが明示されることは考えにくい。また、整列をたとえば体育科との関連で捉えようとしても、学習指導要領には「集合、整頓、列の増減などの行動の仕方を身に着け、能動的で安全な集団としての行動ができるようにするための指導については、各学年の各領域において適切に行うこと」³⁾と示されるのみで、整列の際に背の高さにしたがうべきことが述べられているわけではない。

こうした「背の順」に関して、松尾（2022）は「背の順に並ばせるのは、身体的特徴による差別の誇示である。」「これが身体的特徴による差別であることは、大人が会社等でこれを強制されないというのを考えればわかる。明確な差別であり、いじめの類の行為である」⁴⁾と述べる。この方法は望ましくないばかりか、人権侵害ですらあるとの指摘である。同様の主張に、「背の順に並ばせてよいのか？」と問う長田（1992）⁵⁾を挙げることができる。

また、鈴木（2017）は小学生の容姿に関する劣等感について、男子児童は「身長」に関するものが一番強く、続いて「体重」「歯」にコンプレックスを抱いていること、女子児童は「体重」にもっとも劣等感を抱いており、「足の太さ」「身長」がこれに続くことを明らかにしている⁶⁾。かくも、身長は児童のコンプレックスと緊密に関わっており、かつ、これが本人にはどうしようもない身体的特徴であるにもかかわらず、日常的に確認させられる仕掛けが学校には設けられている。かくも理不尽な身長を指標とする整列が、「以前からそうだったから」と漫然と続けられるならば、これを看過すべきではないだろう。ましてや、子どもの自己肯定感や自尊感情を高めるべきと喧伝⁷⁾されている現在、これへの対応の必要はいっそうである。

かたや、研究データベース CiNii に拠ったが関連する研究論文を見つけることはできず、現実と研究状況との乖離は大きいと予想できる。そこで本稿は、この整列の歴史的背景を探るとともに、現在の小学校教員は学校でこの制度をどのように捉えているのか、また、元児童はこれをいかに受け止めていたのかを明らかにしようとするものである。

3. 身長にもとづく整列の歴史的背景

学校での整列に関する歴史を遡れば、1886（明治 19）年の小学校令にもとづく「小学校ノ学科及其程度」において必修科目だった体操科に注目できる。このときに隊列運動が新たに加えられたのである。これについて、鈴木（2017）は「気をつけや休め、そして行進など、現在も学校体育の集団行動として取り組まれているもの」⁸⁾と述べ、隊列運動が集団行動の先駆けであることが示されている。

では、隊列運動はどのような意義を与えられたのだろうか。当時の隊列運動の指導書としては、松石安治『普通体操隊列運動法』（金港堂、1886）、や飯塚勘蔵『小学隊列運動法』（集英堂、1886）などが挙げられるという⁹⁾。前者では、「隊列運動ノ目的ハ生徒ニ規律ノ習慣ヲ與ヘ體力ヲ強健ニシ品格氣質ヲ高尚ニスルニ在リ故ニ教師タル者ハ最モ着意シテ教授セサルヘカラス」¹⁰⁾とある。つまり、規律の習慣を与えること、体力を強健にすること、品格氣質を高尚にすることがその目的であった。

また、後者では、「此運動ノ目的ハ規律ヲ嚴正ニシテ従順ノ習慣ヲ養成シ各々伍ヲ組ミテ友情ヲ深厚ニシ又統督者トナリテハ威儀アランコトヲ涵養ニ兼テ氣質ヲ高尚ナラシムルト共ニ體力ヲ強健ニスルニ在リ故ニ教師タルモノハ威儀ヲ嚴正ニシ精神ヲ活潑ニシ規律ヲ確守シ動作ヲ完全シ苟モ教師タルノ模範ヲ失フコトナカレ」¹¹⁾と記されている。このように隊列運動では、規律を厳正にすること、従順の習慣を養成すること、友情を深く厚いものにすることがねらわれており、あわせて統督する教師のありかたにも触れていることがわかる。

なお、隊列運動は 1888（明治 21）年に兵式体操と改称され、同年に『小学兵式体操書』が発行されているが、その目的は「生徒ノ體力ヲ強壯ニシ規律ニ服従スルノ習慣ヲ與ヘ品位氣質ヲ高尚ナラシムルニ在リ」¹²⁾とあり、隊列運動との大きな違いは見られない。

そして、これらから一世紀のち、『体育（保健体育）における集団行動指導の手引（改訂版）』（1993）によれば、集団行動の指導の要点は「(1) 集団の意義や必要性を理解させる。(2) 集団行動の基本的な行動様式を身に付けさせる。(3) 集団の約束やきまりを守って行動させる。(4) 敏速・的確に行動させる。(5) 互いに協力して自己の責任を果たさせる。(6) リーダーの指示に従って行動させる。(7) 安全に留意して行動させる」¹³⁾である。ここから、規律、品格、友情を旨とした隊列運動、兵式体操ほどねらいは明確でないものの、集団で行動することの意義が示されている点で、これらと現代の集団行動との繋がりを見出すことができる。

とはいえ、整列が背の順にしたがうべきことを直接に示すものは見当たらない。各校での教育課程の大綱的基準となる学習指導要領を見れば、1958 年告示の体育科での「指導上の留意点」に、「教師の合図で早く整列できるようにする」、「場所の広さに応じ縦隊や横隊に整列することができるようにする」とあり、また、「G 体育や保健に関する知識」の中に「A 健康診断の結果に基いて、自己の身長・体重・胸囲・座高を知り、また、他人や同年齢の者と比較し、自己のからだの形態的な発達状態を知る」¹⁴⁾と示される点で、整列と背の高さに関する記述は認められる。とはいえ、これ以上の説明はない。つまり、学習指導要領がこの仕掛けを規定しているとは言えない。

これ以降の学習指導要領についても同様であり、最新の『体育編小学校学習指導要領』（2017）では、「集合、整頓、列の増減などの行動の仕方を身に付け、能率的で安全な集団としての行動

ができるようにするための指導」¹⁵⁾が挙げられるほか、「巧みな動きを高めるための運動」の例として「グループで一列に並んだり、円陣や二列縦隊で手をつないだりして、呼吸を合わせて一斉に前後左右に跳んだり、音楽に合わせてリズムを変えながら跳んだりすること」¹⁶⁾とあるものの、整列のあり方には言及されていないのである。

4. 「背の順」での整列に対する小学校教員の受け止め

(1) 調査の対象と方法

以上のように根拠が明らかではない背の高さにもとづく整列について、小学校教員はどのように捉えているのだろうか。これを探るために、表1に示す現職教員5名にインタビュー調査を試みた。2022年11月21日から12月2日にかけて一人あたり15分から25分で行った調査では、表2に挙げる内容を中心に、かれらの受け止めに明らかにしようとした。

表1 調査対象者一覧

教員	勤務自治体	実施形態	実施日
A	京都市	対面	11月21日
B	京都市	対面	11月21日
C	京都市	対面	11月28日
D	京都市	対面	12月2日
E	京都市	対面	12月2日

表2 小学校教員への質問項目

1	整列において「背の順」を用いたことがあるか。
2	「背の順」を用いる時にどのような意図があったか。
3	「背の順」で並ばせる際に子ども達に説明をしていたか。
4	「背の順」にまつわるトラブルはあったか。
5	「背の順」をどのような場面で用いていたか。

(2) 結果と考察

1) 教員から見た身長にもとづく整列の意義

調査の結果、次の二点が明らかとなった。第一は、「子どもたちに前方が見えやすいように」という意図をすべての教員が持っており、全校集会や公演を鑑賞する際など前を向くべき場面で、この整列方法を用いている。その際、Eを除きこのことを児童に説明していると答えた。教員は子どもに前方に集中させることをねらい、この方法を採用していることがわかる。

また、AとCは、体育の表現運動など集団全体としての美しさが重視される場面でも、背の順の整列を行っているとした。ここでの「美しさ」とは、子どもたちの列が乱れず一体感の

あることを指しており、明治期の隊列運動以来の規律ある集団が望ましいという価値観に裏打ちされるものと言えるだろう。

第二は、生活指導に連なる危機管理として、この方法が用いられていることである。たとえば、Cは次の趣旨を語っている。

前方に注目しなければならない公演の時の出来事だが、適当な順番に並ばせた時、身長の大きな児童が前方にいたため、後方にいた背の低い子が「見にくい」と呟き、その背の高い子が自分の悪口を言われていると勘違いしたことで、トラブルに発展したことがある。このことから、トラブルの未然防止という視点からも背の順で並んだ方が良い場合があると思う。

また、整列のルールを一本化することが効率的という判断もうかがえる。Eは、前に注目すべき場面で、名簿順などでは後ろの児童が前を見るために座り方を変えたり中腰になることがあり、児童にとって面倒なことに加えて、教員も児童の座り方を指導しなければならないために、教員にも面倒な動きを要することになると述べた。かくも、集団的に児童を扱わなければならない学校では、活動の効率性に留意されていることがわかる。

2) 身長にもとづく整列に対する教員の問題意識

インタビューでは、この仕掛けに対する教員の問題意識を聴くこともできた。背の順での整列に対する批判についてAは、学校で当たり前に存在してきた慣習の一つとして、メリットとデメリットが議論されておらず、どんな教育的な効果があるのかも明らかでないこの方法での整列は、悪しき風習としての「隠れたカリキュラム」かもしれないと話している。

またEは、この方法が差別的だと取り上げられることで注目され、これへの不満を招くことになりかねないと述べた。同様にDも、身長の違いが差別に繋がる可能性はあるため、子どもたちの中で差別意識が生まれないように、成長の速さは人それぞれであることを意識させるような声掛けを積極的に行っていると話してくれた。

あるいはCは、背の順で並んだ際に一番前の児童が、身長が一番低いから一番前を嫌がる場合もあるが、名簿順でも一番前を嫌がる児童もいた経験を踏まえれば、子どもたちの気持ちをないがしろにしないことは大切だが、すべての児童が気持ちよく過ごすことは難しくもあるため、敏感になりすぎる必要はないと思うと述べた。くわえて、これに関連するトラブルの経験も出された。Bは身長が低く、背の順で並ぶといつも一番前だった児童の中には、どうせ自分が一番低いと投げやりになり、自信を無くしている子もいた。また、こうしたケースは高学年になるほど多いように思うと語っている。

これらから、教員間で濃淡はあれども、背の高さにもとづく整列が問題をはらむと捉えられる一方、これを活用しつつけてもいるのが実態に近いと捉えられる。

5. 「背の順」での整列に対する元児童の回想

(1) 調査の対象と方法

小学校でのこの整列の仕方が、当時の児童から見てどのような意味を持っていたのかを明ら

かにするために、機縁法により X 大学の学生に自身の経験を回想してもらうインタビュー調査を行った。

その際、約 10 年前の記憶は不正確になりがちなことを踏まえ、インフォーマントとのやりとりを通じて多面的な経験を引き出すよう努めた。調査は表 3 に示すように、2022 年 11 月 1 日から 12 月 6 日に、それぞれ 15 分から 25 分程度で実施した。

表 3 調査対象者一覧

学生	出身小学校の自治体	学年	年齢	性別	実施形態	実施日
a	京都府京都市	4回生	22歳	女	対面	11月1日
b	京都府京都市	4回生	22歳	男	対面	11月2日
c	京都府宇治市	4回生	22歳	男	対面	12月6日
d	京都府宇治市	4回生	22歳	男	対面	11月16日
e	京都府京都市	4回生	22歳	男	対面	11月22日
f	大阪府寝屋川市	4回生	22歳	男	対面	11月25日

表 4 学生への質問項目

1	「背の順」を経験したことがあるか。
2	「背の順」はどのような場面で用いていたか。
3	「背の順」で嫌な思いをしたことはあるか。
4	「背の順」で嬉しかったことはあるか。
5	男女混合での「背の順」の経験はあるか。
6	1 年間で「背の順」での並ぶ順番の変動はあったか。
7	「背の順」で並ぶことに対しての教員からの説明はあったか。

(2) 結果と考察

1) 「背の順」整列の具体

まず、かれらに共通するのは、児童としてこの順で整列する理由について教員から説明を受けた経験はなく、この並び方について考えたことも特になかったということである。c が何度も繰り返し行っていた整列方法だったため、背の順に疑問を持ったことはなかったと述べるように、当たり前なものだと受け止めていたことがわかった。

さて、a を除く 6 人は多くの場面でこれが用いられていたと答えた。a は「毎週の全校集会の時の整列」のみだったが、他では「体育の始まりと終わりの整列の場面」、「全校集会」、「教室移動の際の整列」、「避難訓練」という記憶があった。それは、整列する際には、暗黙の了解で背の順だと、一番馴染みのある整列方法だったと b が述べ、また、無意識にこの指標にしたがうほどに染みついていると e が話すほどに、繰り返し行われていたことがわかる。

これらのうち、集会や授業時などは「前を向くべき場面」であり、教員側の意図と一致しているが、教室移動や避難訓練がこれに該当すると思われない。そこでのねらいや意義が不明な

まま、何気なくこの順で並ぶようになっていることを示すものではないだろうか。

2) 整列における自身の位置①—身長と自尊感情

この順で列を作ることは、児童それぞれの成長にともなって自身の位置が変わることも意味する。これに関するかれらの記憶をたどることができた。

まず、周りの人よりも早い段階で身長が伸びて、高学年になるにつれて成長が遅くなっていった。列の後ろの方から段々と前の方になっていく中、抜かされていくことを実感し、焦りを感じたと b は述べ、中学年までは身長が高い方だったが、高学年になり、周りの人に抜かされていき、次第に真ん中に近づいていくことに対して焦りを感じていた。また、自分の身長がこれ以上伸びないのではと不安を抱いたと c は話している。ここには、整列で後方にいるのが良いこと、つまり、身長と自身の価値が正に相関するという価値観が横たわっていること、身体的特徴に社会的スティグマの見られることがわかる。

その点は、他のインフォーマントの回答からも明らかである。d は背の順にまつわる否定的な経験をしていないことについて、自分は背が高い方だったので身長にコンプレックスを抱いたことがないこと、また、身長が高いことをステータスに感じていたと語っている。また e が、高学年になるにつれて大きくなっていったため、前は自分の後ろにいた女子を抜かしていくことが嬉しかったと思い返していることから、身長にもとづく優劣という価値基準が存在したと言えるだろう。

くわえて、男女あわせての身長にしたがう整列の経験として、運動会の組体操で二人組を作る際に、体格の似た者同士が良いという理由から、学年全員で背の順に整列した。そのときの一番前の児童が男子であり、150 人近くの子どもの前で自身の身長が目に見える形で示されてしまい、嫌な顔をしていたと、b は記憶している。このことは、男子児童が身長にもっとも劣等感を抱きやすいという前述の研究の知見と符合する。

以上から、児童は自分の背が伸びること自体よりも、周囲と比べて自分がどれほど前方か後方かという相対的な位置により関心の高いこと、そして、背の高さによる整列はこの価値観を強化する役割を果たしていることがわかる。

3) 整列における自身の位置②—ジェンダーバイアスと友人関係

もっとも、以上の回想はあくまでも男子児童によるものであり、女子児童についてはいささか状況を異にするかもしれない。

女性である a は、小学校に入学してから中学年までは背が高い方だったため、整列では後ろの方だった。しかし、高学年になってからは成長の速度が遅くなったため、少しずつ前の方に位置するようになり、身長で勝っていた人に抜かされていくことが少し嫌だったと語り、この受け止めは、元男子児童たちの話と共通する。

ただし f は、高学年になると女子の中には、自分の身長が高いことにコンプレックスを抱いている女子児童もあり、猫背になりながら生活を送っている人もいた記憶があると回想している。これは、あくまでも男子児童から見た女子の様子に過ぎないが、背の高いことに肯定的な男児に対して、女児は違う受け止めをしているかもしれないとの判断は留保したい。

なお、当時の児童にとって、後方にいることがなぜ望ましいと考えられたかについては、付け加えるべき点がある。それは、a や c が話しているように、背の順に並んだ際に、後ろの方ほど教員からの目が届きにくく、友達とお喋りができたからであった。また、高学年の場合、列

の後ろは男子が多くなり¹⁷⁾、そこには仲の良い友達が集まっていたので嬉しかった。あるいは、整列の際に背の高いことをきっかけに話しかけられ、そこから親しくなるとbが述べていることから、男女を問わず友人関係上、背の高いことは学校生活での快適さに通じていた点にも注目すべきだろう。

6. 結論

以上から、次の整理ができる。

その一、隊列運動と兵式体操に端を発し、こんにちの集団行動に連なる学校での整列については概括的な把握ができるものの、それが身長にもとづき行われるべき根拠は不明なままである。この点で、「規律」「体力」「品格」等を身につけることが目指された戦前の整列と比べれば、児童の注意を前方に向けさせること、整列のルールを一つに定めることで不要なトラブルを回避すること、そして見た目の美しさを強調するためのこの方法での整列は、子どもの陶冶をねらうものではなく、あくまでも学校運営や学級経営上の仕掛けと捉えられる。

その二、身長より高いことが望ましいという価値観を背景に、児童それぞれの学級での相対的な地位を示す役割をこの整列は果たしており、発育著しい時期の児童への影響は甚大である。さらに、ジェンダー的背景を仮定すれば、男子児童では後方にいることを肯定的に受け止める同時に、女子児童では背の高いことが忌避される可能性を残している。

このように、「背の順」での整列という制度は、その効用と限界を問い直されることなくルーチンとして存続する一方、児童に対する波及力は大きく、かれらの日々の学校生活を強く刻印していることが明瞭である。

注

- 1) 柏木敦 (1995) 「明治前期における“就学”の一断面」『教育学雑誌』第29号、p.104.
- 2) 村松泰子 (2003) 「学校教育とジェンダー: 研究と実践の動向」『学術の動向』2003年4月号、p.38.
- 3) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説体育編』pp.167-168.
- 4) 松尾英明 (2022) 『不親切教師のススメ』さくら社、pp.116-117.
- 5) 長田健介 (1992) 「背の順に並ばせてよいのか?」『研修読本 子どもの権利と責任』(『児童心理』46、No.16、1992年12月臨時増刊)、pp.99-101.
- 6) 鈴木翔 (2017) 「身体的特徴の自己認識といじめ被害傾向の関連性をめぐる小学生文化に関する一考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』57、pp.2-3.
- 7) 教育再生実行会議 (2017) 「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上」(第十次提言)
- 8) 鈴木慶子 (2017) 「演技として取り組む集団行動の指導事例とその考察—小学校高学年を対象に—」『駿河台大学論叢』54、p.85.

- 9) 森田信博 (1995) 『『体育』概念の形成過程について』『秋田大学教育学部研究紀要』48、p.65.
- 10) 松石安治 (1886) 『普通体操隊列運動法』金港堂、p.2. (国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/860477/1/2>) (2023 年 4 月 15 日最終閲覧。以下、同じ)
- 11) 飯塚勘蔵 (1886) 『小学隊列運動法』集英堂、p.1. (国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/860107>)
- 12) 松岡彪 (1888) 『小学兵式体操書』船井政太郎発行、p.2. (国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/860118/1/3>)
- 13) 文部科学省 (1993) 『体育 (保健体育) における集団行動指導の手引 (改訂版)』 p.222.
- 14) 文部科学省 (1958) 『小学校学習指導要領 第 8 節体育』(国立教育政策研究所教育研究データベース <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s33e/chap2-8.htm>)
- 15) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編』 p.211 ほか。
- 16) 同上、p.119.
- 17) 文部科学省「学校保健統計調査」の「年齢別 平均身長・平均体重・平均座高の推移」(2015 年)によれば、児童は 9 歳で男子平均が女子平均を 0.1 cm 上回るものの、10 歳では女子が男子を 1.2 cm、また 11 歳では 1.5 cm 上回るので、実際がどうであったかは不明の余地を残すが、一つの回想として挙げる。

追記、本論文は、1 を榊原、2、3、4、5、6 を母木が分担して執筆したのち、全体の調整を榊原が行った。